# 彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻六の本文の位置づけ

中根千絵

## はじめに

論者は、『説林』五三号において、彦根城博物館所蔵『今昔物語』（全巻、表紙の題は『今昔物語』と書いてあるが、内題には『今昔物語集』とある。）の紹介を行ったが、その際、本の空白部分の分析、流布本系共通脱文の分析から、彦根城博物館所蔵『今昔物語』は、内閣文庫本Ｂに近い流布本系の本であり、内閣文庫本Ｂより良い本であろうと論じた。[1] しかし、その位置づけが正しいかどうかは、諸本との一語一語の比較を経て、初めて、立証されるものである。巻一については、先に論集で分析を行い、彦根城博物館本は内閣文庫本Ｂとのみ一致する箇所が多く、これは、『説林』五三号で論じたのと同じ傾向であるが、旧日本古典文学大系の底本である東大本甲や東北大本、野村本とのみ一致する箇所もあり、彦根城博物館所蔵『今昔物語』は、流布本系諸本（内閣文庫本ＡＢＣ、東大本乙）と古本系諸本（東大本甲、東北大本、野村本）の間の状態を有する希有な本であるということを述べた。[2] 巻二の場合は、鈴鹿本という原本に近い本が残っているせいか、古態を残すとされる東大本甲、東北大本、野村本と一致する箇所は非常に少ないという結果が得られた。[3] 巻三では、特に、野村本が流布本系と古本系との狭間で揺れている様を見てとることができた。また、様々な要件から、流布本系は、校訂本文を目指した書物群ではなかったかと推測した。但し、彦根本のように、中間的

な表記を有する書物の場合には、いまだ、そのどちらとも見定めがたいとし、今後、さらに、巻ごとの分析を続け、彦根本の性格を見極めると共に、古態本と流布本の総合的な分析を行っていきたいとした。[4] 巻四の場合に顕著な傾向として現れるのは、古本系との一致度が高く、内閣文庫本Bとの一致度は低いということである。これまで、彦根城博物館本は古態本と流布本の中間的な本として位置づけてきたが、巻四にいたって、古態本の表記を有することが判明したことにより、改めて、彦根本の位置づけを考えてみなければならないこととなった。[5] 巻五の場合は、内閣文庫本Bとの一致度は他の流布本と同じ程度である。巻五では、巻二と同じく、鈴鹿本という原本に近い本が残っているせいか、古態を残すとされる東大本甲、東北大本、野村本と一致する箇所は非常に少ないという結果が得られた。但し、巻五では全体として、流布本系の諸本と表記が一致するにも関わらず、天竺という国名については、古本系諸本に依っており、これは巻四と同じである。[6] 従って、巻六についても引き続き、彦根城博物館所蔵『今昔物語』の本文を他の諸本と比較することにより、彦根博物館所蔵『今昔物語』巻六の位置づけを試みることにしたい。但し、諸本の収集は、いまだ、その途上にあり、旧日本古典文学大系『今昔物語集』の校異と頭注から必要な部分を抜き出す形で、諸本との比較を行うこととする。

## 彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻六の本文異同

凡例

一番上の段は旧日本古典文学大系のページと行、次の段は彦根城博物館所蔵本の本文、次の段は彦根城博物館所蔵本と同じ本文を持つ本の種類である。（但し、異体字などの字形が異なるものについてはこれに含め、その都度指摘した。）

★印は彦根城博物館所蔵本独自の部分であり、その部分については諸本の例を示した。旧日本古典文学大系に載る考察は必要に応じて「」に入れて付した。

各本の略語は次の通りである。

底―旧日本古典文学大系『今昔物語集』の底本（東大本甲）【旧日本古典文学大系『今昔物語集』の底本が現在の諸本のうちの古態本にあたると考えられることから、底の字を使うことで、それが一見して明らかとなるようにした。】

北―東北大本　野―野村本　以上古本　乙―東大本乙　A―内閣文庫本A　B―内閣文庫本B　C―内閣文庫本C

以上流布本　東大本甲を除く諸本―諸

彦―彦根城博物館所蔵本

大―旧日本古典文学大系

巻六目録

五一　行出家佛舎利（第四）乙ABC

視華蔵界（第三四）B

阿弥陀経（第四〇）乙ABC

得活語（第四一）乙ABC

〔　脱　〕（第四六）「張謝敷依薬師経力除病語第四十六」野AC

〔底北乙Bは脱、底北Bは行間に補入〕

巻六第一話

五二　9　釈迦牟尼佛ト　乙ABC（乙ABCは釋）

10　一切衆生ノ為　　ＡＢ
10　衆生ノ機ニ　　Ｂ（随ティと朱補）
10　入涅槃シ給ヒキト　　ＡＣ
11　四部ノ弟子一ツ也　　ＡＢＣ「四部ノ弟子□一ツ也」底北野乙大
　　古本は一行と約二字分空白。流布本は、空格を設けない。

五三
5　丈六ノ姿　　乙ＡＢＣ
7　壊スル時ニ　　Ｂ
8　空ニ大キニ　　諸
9　蹈壊テ入約二字分欠　　底北乙ＡＢ大（空白部、底北約二行、乙十八字と一行、
　　チ怖レ給ヒケリ　　ＡＢ二字分、Ｂは空白部に朱連読符を附し　チにティと朱傍　レに朱圏点、底北乙Ａ
　　Ｂ大は踏）「踏壊テ入□チ怖シ給シケリ」野（空白部　約三字分と一行）「踏壊テ
　　入ヌ恐怖レ給ヒケリ」Ｃ
12　渡ラントシケル　　諸
12　其ノ後ニ漢ノ　　ＡＢＣ
13　秦始皇　　乙ＡＢＣ

巻六第二話
五四　6　待給フ間ニ　　乙ＡＢＣ
7　即チ　　底乙ＡＢＣ（底のチはテとケの中間の字体　チと朱訂）
9　不受ヌ　　底野Ｂ（底のヌはスに近し）

9　多アリ　乙ＡＢ
11　形モ替リ　野乙ＡＢＣ
14　白馬寺　乙ＡＢ（空白部　乙Ａは約八字と一行、Ｂは約六字と一行　Ｂは本ノマヽと朱注）「白馬寺□付レタル也」
一行と約五字分欠
付タル也　底北大（空白部一行）「白馬寺□付シタル也」野（空白部約十七字と一行）「白馬寺ト付タル也」Ｃ

五五

1　奇シフ禿ノ　乙Ａ
5　天王ヨリ　ＡＢＣ
5　被弃ヌヘク　乙Ａ（Ａの弃は棄）
6　値テ力競ウシテ　底北野（ウに底はヲ歟、野はヲと朱傍）
6　可被弃キ也　乙Ａ
8　来ルハ　Ｂ（ハにナシィと朱傍）
12　天皇モ此ヲ聞テ　Ｂ
14　速　底北野ＡＢ（Ｂはニィと朱補）
14　可有キ由ヲ　乙ＡＢＣ
14　宣旨ヲ　約三字分欠　底北乙ＡＢ大（乙Ａの空白部は約一字分、Ｂは本ノマヽと朱注）「宣旨ノ□」野「宣旨ヲ下シ」Ｃ
16　髪　約二字分欠　諸大（Ｂの空白部は約二字分、北はイ二字欠と朱傍）「髪長ク」Ｃ
16　盛ナル者モ　ＡＢＣ
16　才ノ営立テ、　乙ＡＢＣ（Ｂはノにヲィ　立テヽにテハィと朱傍）

五六　2　方ニ　乙ＡＢＣ
2　其ノ外ニ　乙ＡＣ
4　居ヘ並タリ　乙Ａ
4　西ノ方ニ　諸
4　摩騰法師　乙ＡＢＣ
5　荘レル箱共　諸（諸は荘）
6　道士方ニ　野ＡＢＣ
8　法文付ケツ　Ｂ（文の下にニ火ヲィと朱補）
12　約二字分欠有リ　諸大（乙Ｂの空白部は約二字分、Ａ一字分、Ｂは本ノマヽと朱注）「居アリ」Ｃ（傍訓ヲル）
13　息約二字分欠　諸大（野の空白部は約四字分、Ａ三字分）「息絶テ」Ｃ
13　方ニ涙テ　Ａ
14　思議歟　底北野（北は吉に思議ィと朱傍）
15　不吉ノ　野乙ＡＢＣ
15　礼シ給フ　野乙ＡＢＣ

巻六第三話

五七　6　勤メ行フ　北野乙ＡＢ
10　追ル、ソ　乙ＡＢＣ（Ｂは追の下に却セラィと朱補）
11　開ク　乙ＡＢＣ

13　大師 約三字分欠 達磨「大師達磨」大

16　被貴ト　乙ＡＢＣ

五八

1　被尋ル　野乙ＡＢ

12　思シ顕以ヲ　Ａ

12　申シ給フ　乙ＡＣ

13　何ニ云フ　★「何云フ」底北野大（何傍訓イカニ）「何ニ云」乙Ａ「何ト云フ」Ｂ「何云」Ｃ

16　約三字分欠 山ト　底乙ＡＢ大（Ｂの空白部は約三字分　本ノマヽと朱注）「山ト」北野（山の上に北は「此間三字欠ィ」、野は「此間闕字官東」と朱注）「梁山ト」Ｃ

五九

2　棺ニ入レテ　乙ＡＢ

3　菰嶺ノ土ニシテ　底北野ＡＢ（土に底は上歟と傍書、Ｂは上ィと朱傍）

6　崩シ給ヒニキト　底乙ＡＢ（底のキは古体）

7　胡僧ヲ誰人ナラムト　諸（乙のムはン）

10　上ニ　乙

11　片足ヲ弃ルト有ハ　ＡＢＣ

11　此　北ＡＢＣ

巻六第四話

六十

3　佛法植ヘムカ為ニ　ＡＢ（Ｂは植に傳ィと朱傍）

7　入給ヒニキ　乙ＡＢＣ

11　汝チ云フ事　乙ＡＢ

11　毎年　★「毎事ニ」底野「毎事」北乙ＡＢＣ

12　出御スル者也　北ＡＢＣ

15　七日限リ　Ｂ

六一　1　華ヲ　ＡＢＣ

2　何ニト　北野乙ＡＢ

3　今　諸

神僧伝「会更請三七日」、打聞「イマ七日ノヘラルヘキ由ヲ申ス」。ただし、諸本、いずれも「七」字は見えない。（野村本・Ｂ本の傍書にはあり）。

5　暁　乙ＡＢＣ

7　白キ玉有リ驚テ壺ノ内ヨリ　野乙ＡＢＣ（乙の有はア、Ｃは有リのリ脱、野は驚に圏点、Ｂはテにキィと朱傍）

11　誓ヒ置キ給ヘリ　諸（底のリは変　即ちキの古体の如し）

13　誓テ　乙ＡＢＣ（Ｂは朱圏点）

14　砧碪共　底北ＡＢ大（Ｂは共の下にニィと朱補）「砧碪共ニ」野「砧鎚共ニ」乙「砧槌共ニ」Ｃ

砧は銭砧の用字をかえたもの。

六二　3　其ノ國ノ　★「其ノ國」底北野大「其ノ國ニ」乙ＡＢ「其國ニ」Ｃ

巻六第五話

六二　8　摩耶夫人ノ　乙ＡＢＣ

8　九十一日ヵ間　乙ＡＢＣ
11　腰ヲ　乙ＡＢＣ
六三
1　人ヤ　底北野Ｂ
3　負給フ　乙ＡＢＣ
8　来リシ道　ＡＢＣ
9　震旦ヘ　乙ＡＢＣ
9　震旦ニ傳ヘテムト　底野
15　勧メ給ヘハ　諸（底のハはリの如くにも見ゆ、諸は勧）
15　此ノ事　ＡＢＣ
六四
2　懐妊　ＡＢ
3　密ニ　乙ＡＢＣ
12　世ニ　野乙ＡＢＣ
12　佛ノ如　ＡＢ
15　末世マテ　底乙ＡＣ

巻六第六話
六五
3　宗ヵ　諸（孫、底北の偏は歹に近し、北は宗、野は宗東、乙Ａは宗歟、Ｂは宗ィと朱傍）「玄宗ノ」Ｃ
4　玄孫ノ　ＡＢＣ
5　タトルヽト　乙ＡＢＣ
5　多ク火ヲ

| | | | |
|---|---|---|---|
| | 6 | 早ウ | 底ＡＣ |
| | 6 | 怖シ氣ナル者共ノ | ＡＢＣ |
| | 7 | 経ヲ音ヲ | Ｂ |
| | 8 | 免テ | 乙ＡＢＣ |
| | 10 | 臭キ香 | ＡＢＣ（Ｂの臭は臭） |
| | 12 | 早ウ | 乙Ａ |
| | 13 | 有様ヲ | 乙ＡＢＣ |
| | 15 | 爛レ | 乙ＡＢＣ |
| | 15 | 鯉テ | 乙ＡＢ（Ｂは懐歟と傍書、Ｂは不審紙） |
| 六六 | 1 | 有ケム時 | Ｃ |
| | 3 | 吸ヒ舐レテハ | ＢＣ（Ｂはレテの右側にルラィ　左傍にラ歟と朱傍） |
| | 3 | 愈ナムト | 野乙ＡＢＣ（乙Ｂのムはン）「愈サムト」底北大 |
| | 5 | 不浄非スト | 乙ＡＢＣ（Ｂはニィと朱補） |
| | 6 | 他ヲ穢マム | 北野乙ＡＢ（野の穢は変　穢「傍訓キタナ」と朱傍、乙のムはン） |
| | 10 | 成リ持行テ | 底ＡＢＣ（底のリは変　即ち第一画の痕跡のみ） |
| | 12 | 出ル如クナル | 乙ＡＢＣ |
| | 16 | 掻消ツ様ニ | 底ＡＣ |
| 六七 | 2 | 法蔵ト | 乙ＡＢＣ（Ｂは法の上に挿入符「正歟依下文」と朱注） |
| | 6 | 今其此ノ報ヲ | 乙ＡＢＣ |
| | 11 | 廣ク | 野乙ＡＢＣ |

六八　5　天神ニ祠ニ　AC
　　7　祠ラムニ　諸（乙Bのムはン）
　　7　不吉セラムヤ　乙A（乙のムはン）
　　13　奇異也ト　乙ABC
　　15　免ヌ　AB
　　15　慈氏菩薩ヲ念シ奉テ　野乙ABC
六九　2　慈氏菩薩　乙ABC
　　2　被圍遶レ給ヘルヲ　野AB
　　6　名ヲ　乙ABC
　　7　風波躰ヲ　ABC（Bはノ歟と朱補）
　　12　悪行断テ　乙ABC（Bはテにンィと朱傍）
　　12　此レヲ　乙ABC
七十　1　傾テ　底野乙B（底野の傍訓カタムヒ）
　　1　流ヌヘシ　乙AB
　　5　然テ　大「然ト受ノ間脱文」と北本しるす。

巻六第七話
七十　13　持来　AB

巻六第八話

七一　6　大法ヲ説給テ　諸
　　8　数百歳ノ後　乙ＡＢ
　　8　器移スカ　野乙ＡＢ

巻六第九話

七二　3　震旦ニ渡テ　乙Ａ
　　6　西蕃ノ　野乙ＡＢＣ
　　7　城ヨリ云　Ｂ（リの下に「此處四五字ホト空シィ」と朱注）「城ヨリ告テ云ク」Ｃ「城ヨリ□云」底北野乙Ａ大（乙Ａの空白部は約一字分）
　　7　五國ノ軍ニ　乙ＡＢＣ
　　11　願クハ　乙Ｂ
　　16　副ヘルヤ　ＡＢ（Ｂはヤに也歟と朱傍）
　　16　亦安西城ニ　乙ＡＢＣ

七三　1　来レルヤ　ＡＢＣ（Ｂはヤに也歟と朱傍）
　　2　二月十一日　乙ＡＢＣ
　　2　三十里ヵ内　乙ＡＢ
　　3　鼓打テ　諸（底はテをチと朱訂）
　　4　笛ヲ　ＡＢＣ
　　5　食切リ及ヒ　乙ＡＢＣ
　　7　謹敬テ　乙ＡＢＣ「謹ニ敬テ」底北野（野はニにミと朱傍）「謹〻敬テ」大

8　西北ス角ニ　　B（スにノィと朱傍）
9　毘沙門天ノ置テ　　★「毘沙門天ノ□置テ」底北野乙A大（約一字分空格）「毘沙門天ヲ置テ」B「毘沙門天ノ像ヲ置テ」C
10　香花飲食捧ケ　　乙ABC（Bはヲィと朱補）
12　始マルト　　B

巻六第十話

七四　4　此ノ土ノ　　底北乙
4　輩モ亦　　★「輩モ亦」諸「輩ニ亦」底諸
6　何ソ　　乙ABC
8　聞果テ　　諸
11　尊勝真言ノ

巻六第十一話

七四　14　侍活語　　底北B（底は侍を得と朱訂　Bは得ィと朱傍）
15　強ト云フ　　ABC
16　生類数　　ABC
七五　7　将至ルニ　　乙B
8　何ノ故　　乙ABC
9　此罪人　　北乙AC

9　暫クノ　乙B「暫ク」底北野大（野の暫は変）「暫ノ」AC
古本は、通常の語法では「暫ク此ノ罪人ノ命ヲ…」というべきところ、「此ノ罪人ノ」を強調せんとして前に言ったために副詞が正常の位置を失ったものと理解される。

12　歓喜心ノ中ニ　乙ABC
13　安遁　ABC
14　汝カ心　乙ABC
15　訪ハンカ為ニ　諸
16　失給ヒヌ　乙B（Bはトィと朱補）

巻六第十二話

七六　10　開皇三年ト云フ　底北野AB（フの下に北はニと補入、Bはトシィと朱補）
11　其ノ日　乙AB
14　王向テ　底野AC
七七　1　不見へ成ニキ　乙AB

巻六第十三話

七七　12　旅宿セリ　乙ABC
15　抜カント為ルニ　諸
16　縣ノ官　乙ABC
七八　8　緑ノ袈裟ノ　北野乙AC

10　頭ノ疵ヲ　乙ＡＢＣ
16　家在マシテ　Ｂ（朱圏点「道路ツ、カナカラン為ニィ」と朱傍）
16　依テ畫スルニ　北Ｂ「依テ盡スルニ」野「衣ヲ盡スルニ」Ｃ「依ヲ畫スルニ」底乙Ａ「依」は「衣」の増画か。

七九
1　付タリ　乙ＡＢＣ
2　不消リキ　野乙ＡＢ
3　云フ聞テ　乙ＡＢ（Ｂはヲィと朱傍）
3　家ノ人共ニ　乙ＡＢＣ

巻六第十四話

七九
9　震旦約［四字分欠］ノ代ニ「震旦ノ［　］ノ代ニ」底北野乙大（野乙の空白部は約三字分）「震旦［　］ノ世ニ」ＡＢ（Ｂの空白部は約四字分　本のマ、と朱注）「震旦ノ玄宗ノ代ニ」Ｃ
9　都督ニ［約五字分欠］ノ諸大（乙Ａの空白部は三字分、Ｂは約五字分、乙はノ脱）「都督ニテ有シ張亮ト」Ｃ
張亮ト
9　長吏　諸（史は吏に作る）
14　破レヌト　底乙ＡＣ
15　人ヲ呼テ　乙ＡＢＣ
16　半ヲハ　北ＡＢＣ（Ｂはヲにナシィと朱傍）
16　裂テ砕ケルカ如シ　野乙ＡＢＣ

八十
3　悲キ事　野乙ＡＢＣ大「非キ事」底北（底は悲歟と朱傍）

「悲を非とするのは省文か。」

巻六第十五話

八十　11　工能　　乙ＡＢＣ（Ｂは功徳ィと朱傍）

12　供養シ奉リ　　乙ＡＢＣ

14　一人ノ僧　　乙ＡＣ

八一　2　恵鏡ニ授テ　　底乙ＡＣ

8　造ル所ノ　　乙ＡＢＣ

10　如ク也　　乙ＡＢＣ

12　然ノ如ク也　　乙ＡＣ

12　娑婆　　諸（底北の婆は変　即ち波＋衣）

13　導カム為ニ　　乙ＡＣ（乙のムはン）

14　其所見ヘス　　乙Ｂ

15　二佛ヲ　　乙ＡＢＣ

16　十三年有テ　　乙ＡＢＣ

八二　1　死スル時ニ　　乙ＡＢＣ「死ヌル□」野大「死スル□」底北（底はスにヌと朱傍）

「流布本「時ニ」を補うが、死ヌル即チと同じ意の表現で、即チの省略された語法と見れば過不及なく理解できる。結局、死ぬや否や、死ぬとすぐに、の意。」

2　百千菩薩　　乙ＡＢＣ（Ｂはノィと朱補）

3　室ニ　　乙ＡＢＣ

巻六第十六話

八二　7　畫弥陀像　　野乙ＡＢＣ

8　清阿武城　　諸

11　乗テ　　諸（底北野の乗は変　即ち垂の異体に作る）

「古本「垂」（垂）の異体字に作るは、中世における一種の通字。」

13　無限リテ　　★「无限シテ」底北野大「无限リテ」乙「无限リ」ＡＢ「無限テ」Ｃ

15　繪像ノ前ニ　　乙ＡＢＣ

16　暁ニ至テ　　乙ＡＢＣ

巻六第十七話

八三　9　行ヌ　　Ｂ

13　出ラム時ニ　　乙ＡＢＣ（乙Ｂのムはン）

15　遍シ　　諸大「北本遍の下に「満」を補う。他の文献には例を未だ知らない。遍満の意。」

15　語ル　　諸

八四　1　道喩ヲ救ハムカ為ニ　　乙ＡＢＣ（乙Ｂのムはン、Ｃの喩は兪）

2　死ヌ　　底乙ＡＢ

巻六第十八話

八四　6　張ノ元壽　　底野Ｂ（Ｂはノにナシィと朱傍）

7　基ノ家ニ　諸大「このニはニオイテの意であるが、ここでは提示格として用いてある。野村本、内閣文庫本Bのイ本にはニのない本もある。文末の連体形による終止に注意。」

11　空中ニ　乙ABC

11　乗レル　諸（底野の乗は変　即ち垂の異体に作る）

12　庭ノ上　ABC

14　魚鳥等　乙AB

14　隨タリト云ヘトモ　乙A（乙のトモは合字）

八五　1　同シ業ノ　乙ABC

2　人也ト云畢テ　乙AB

2　西ヲ指テ去ヌ　乙ABC

3　見ル所事ヲ　底北AB

巻六第十九話

八五　9　并洲道如　乙AB（Aの道は傍書補入）

9　造阿弥陀像　AB

10　[巫]陽　AB（彦ABの[巫]は草体）「巫陽」底北野大（巫は晋の異体字の上部に近し、野は晋東と朱傍）「淫陽」乙C（乙の淫は草体）

11　諸人ヲ　乙ABC

11　哀ノ心　諸（底はノにフ歟と朱傍あるも採らず、C傍訓アハレム）

12　沈メル　諸（底のメは変　ヌ歟と朱傍あるも採らず）

八六　4　御胸ヨリ　乙ＡＢＣ

8　出離ノ計ヲハ　乙ＡＣ「出離計ヲハ」Ｂ「出家離ノ計ヲバ」底北野大

「古本「出家離」とあるは、成語にあらず。始め「出家」といい、これを後「出離」と訂せんとした痕跡を示すものであろう。」

巻六第二十話

八六　12　鑄弥陀像　乙ＡＢＣ

13　約四字分欠ノ代ニ　諸大（乙Ａの空白部は約三字分、Ｂ約四字分）「隋ノ代ニ」Ｃ

16　銅渓山　野乙ＡＢＣ

16　鐃銅ノ　乙ＡＣ

1　多カナレ　底北野乙

八七　2　刺吏　乙ＡＢＣ「刺史」底北野（判は異体、野は刺と朱傍）「刈史」大「刺」は「刺」の異体字。「判」の異体字「刺」に底本作るが、中世においてはこの類の通用は普通のことであった。（史を吏に作る事も多い）。

3　船有約三字分欠　諸大（乙Ｂの空白部は約三字分、Ｂは本のマ、と朱注）「船有テ」Ｃ

4　死ヌ　底乙

7　信シテ船シテ船并ニ人ヲ　諸（北は船シテの船に諾ヵと朱傍）

7　喜テ　野乙ＡＢＣ

8　卒シテ　★「率シテ」諸（底北野の率は変　底は率ヵと朱傍、乙のシテは合字）

8　銅渓山ニ　乙AC
8　悟ヵ　底北B（Bは悟ィと朱傍）
　語テ　乙ABC（C傍訓クワン）
9　鑵　乙
12　愬テ　野乙ABC
13　受テ　乙ABC（Bは朱圏点）
14　鐃銅ノ　乙AB大「可聞シ」底北野（野は開と朱傍）「可開」C
14　可開シ　乙ABC
15　此言ヲ　諸
15　去ヌ　乙AB
16　呼ヒ集メ　乙ABC
八八　1　出入ヌ　乙AB（Bの拒は木偏　拒ミィと朱傍）
3　柜ニ不護セ

巻六第二十一話

八八　8　造樂師佛　諸
9　約三字分欠ノ代ニ　諸大（野乙ABCの空白部は約三字分、Bは本ノマヽと朱注）「隋ノ代ニ」C
12　遂ニ死ヌ　乙ABC
16　二人ノ　乙ABC
八九　4　修シキヤ　ABC

4　不修ル時ニ　乙B
5　光有　ABC

巻六第二十二話
八九　12　第廿三　底北B（Bは三に二ィと朱傍）
13　嬪也　乙ABC（Bは不審紙、C傍訓ヒトリ）「嬪也」底北野（嬪は変　即ち旁の下部を木に作る）
九十　6　三男ニ女ヲ　野乙ABC
6　此レ皆　野乙AB

巻六第二十三話
九十　12　腫レテ　AB
14　遁サムト　B（Bはムガン）
九一　1　息テ　乙ABC

巻六第二十四話
九一　6　夏候均　北乙ABC
7　勇洲　諸
8　遂ニ悶絶シテ　乙ABC
9　許テ云ク　B

10　何ノ過無クシテ　乙ＡＢＣ（乙ＡＢＣは無が无）
11　受ケント　底北野ＡＢ

巻六第二十五話

九二　6　二人ノ僧有リ　乙ＡＢ
6　一人ヲハ喜辟ト　ＡＢＣ（Ｂは辟に碎ィと朱傍）
9　阿閦如来　乙ＡＢＣ
10　夢覚メテ後　ＡＢＣ（ＡＢＣは覺）

巻六第二十六話

九三　2　得多寶語　乙ＡＢＣ
4　成ル時　ＡＢ
9　塔ヲ見付タリ　諸
10　御眼ニハ　諸「御眼ニ」底大（底本かな一字分の空きあり）
11　伯父ノ　乙ＡＢＣ
12　家ニ還テ　乙ＡＢＣ

九四　2　残ハ失テ　乙ＡＢＣ
3　皆本ノ如ク　乙ＡＢＣ
4　法華経ヲ一部　乙ＡＢＣ
6　后并ニ親類　乙ＡＣ

6　比来テ　ＡＢＣ
11　留シト云テ　北Ｂ
12　倒レ臥ス　底野Ｂ（底はスをヌと朱訂）
12　遂ニ絶ニケリトナム　乙ＡＢＣ（乙Ｂのムはン）

巻六第二十七話

九五　4　縁起ヲ　乙ＡＢＣ
4　傳テ云ク　乙ＡＢＣ
5　尼乾子　底北野Ｂ
7　乱レ　大「語格が整わないので野村本は「乱シ」と改めたが「乱レ」が原姿であろう。」
8　加護ヲ　諸
11　表衣ノ　諸
12　令無メケリト　Ｂ

巻六第二十八話

九五　15　礼子佛語　ＡＢＣ（Ｂは子にチィと朱傍）
16　唐ノ代ニ　乙ＢＣ
九六　3　其時ニ　北Ｃ
4　九百九十三佛ノ　乙ＡＢＣ
4　木ノ葉ニ　野乙ＡＣ

5　傳ヘタルトナム　　ＡＢＣ（Ｂのムはン）

巻六第二十九話

九六　8　汴洲　　諸（底北の汴は変　即ち旁は卯の草体に近し）

9　有リ　　乙ＡＢＣ

15　華ノ上ニ座ス　　ＡＢＣ（Ｃの華は花）

九七　2　地蔵隨ル故ニ　　ＢＣ（Ｂは堕ィと朱傍）

巻六第三十話

九七　10　十七歳ニ至ル　　野乙ＡＢＣ

14　其時　　乙Ｂ

九八　1　救フカ　　ＡＢＣ「救フ力」底野乙大「救フ刀」北野

「流布本、小字に作り、攷証、濁点を打って助詞の扱いとするが、底本・野村本は大字。従って漢字の「力」と見るべきであろう。」

巻六第三十一話

九八　8　震旦ニ　　乙ＡＢＣ

9　約三字分欠ノ代ニ　　諸大（乙の空白部は約二字分、Ａ四字分、Ｂ約三字分　Ｂは本ノマヽ、Ｃはカケタリ）

★「諸ノ僧ニ語テ」底北大「諸ノ僧ニ語ケ」野「諸ニ語テ」乙Ａ「諸仁詣テ」Ｂ（仁詣に僧ニ語ィと朱傍）「諸々ニ語テ」Ｃ

10　諸仁語テ

13　此経ノ　底北野
15　其　乙ＡＢ
16　書寫セム　乙ＡＢＣ（乙Ｂのムはン）
九九
3　驚キ恠シム程　底野ＡＢ（程の下に野は二東、Ｂはニィと朱傍）
4　諸ノ宝ヲ　諸（ヲに底はノ歟、北はノと朱傍あるも採らず、諸は寶）
5　聞テ云ク　乙ＡＢＣ（Ｂは問ィと朱傍）
6　我等ハ　乙ＡＢＣ
7　水漉ク所ニ　乙ＡＢＣ
8　本ノ縁ヲ　乙ＡＢＣ
10　境ニ　諸（底北野の境は変　即ち立心偏）
12　十方偈　乙ＡＢ（Ｂは方に不審紙）
13　語リ聞カセケリ　Ｂ
14　書寫シ奉リケリトナム野乙ＡＢＣ

巻六第三十二話

一〇〇3　約三字分欠ノ代ニ　諸大（Ａの空白部は三字分、乙Ｂ約二字分、Ｂは本ノマ、、Ｃはカケタリと朱注）
5　病ヲ受　乙ＡＢＣ
5　死ス　乙ＡＢＣ
6　兜率天ニ上ニ行テ　Ｂ（上ニのニに朱括弧　イと朱傍）
6　体遠　Ｂ「休遠」底北野乙ＡＣ大（底北Ａの休は異体　即ち右肩に、あり）

6　華臺ニ　休は底本および原典版本、「術」の異体に作る。
11　天ノ樂ハ　乙ＡＢＣ
13　聞テ云ク　ＡＢＣ
　　野乙ＡＢＣ

巻六第三十三話

一〇一　4　王氏　乙ＡＢＣ
　　5　死ス　北野乙
　　9　報セムト　北乙ＡＢＣ（乙Ｂのムはン）
　　12　開ク也ト云　Ｂ
　　15　否ヤ　乙ＡＢＣ
　　16　遁ル、事得ツ　野Ａ
　　16　還ト　乙ＡＢＣ「還ヌト」底北野大　還ルベシの意であろう。

巻六第三十四話

一〇二　10　墮ヌ　野乙
　　10　此ノ地獄ヲ見テ　北乙ＡＢ
　　11　観　諸大「歓」ＡＣ
　　「ＡＣ本以外、かく作るのは、音通によってであろう。」
　　12　唱フル　底乙Ｂ

巻六第三十五話

一〇三4　孫宣徳　　野乙ＡＢＣ

4　書寫華厳経　　底北野Ｂ（底北野は花）

9　死セシ時ニ　　北乙ＡＢＣ

9　一人ノ　　乙ＡＢＣ

一〇四1　癈レ　　大（大は癈）「癈シ」野乙Ａ

「癈シ」に作るのは不可。」

3　帰ル道ヲ　　乙ＡＢＣ

巻六第三十六話

一〇四10　受持門含経　　★「受持阿含語」底北野大「受持阿含経語」乙ＡＢＣ

14　滅没スルニ　　乙ＡＣ

一〇五5　無カリケリトナム　　乙Ｂ（乙のムはン、乙Ｂは无）

巻六第三十七話

一〇五12　死ヌ　　底北乙Ｃ

12　三日ヲ経テ活テ　　乙ＡＢＣ（乙の日は月）

15　告ケム為ニ　　ＡＢＣ（Ｂのムはン）

一〇六1　道如ノ衣鉢ヲ　　ＡＢＣ

2　夢ノ如ク　乙AC
2　二年ニ當テ　乙B（Bはナィと朱補）
3　聞ユ　乙ABC

巻六第三十八話

一〇六7　會稽山ノ陰縣　諸大「乙本の「会稽ノ山陰県」が正しい。」
10　亡セル　乙ABC
13　忽ニ　乙ABC
16　財ノ貧シキカ故ニ　乙ABC
一〇七2　惱ニ　AB
5　而ルニ　乙ABC
6　命ヲ終フ　底北野
6　金栗佛土　底北野B（北は加筆して粟とす、Bは粟ィと朱傍）

巻六第三十九話

一〇七14　行ク　AB（Bはフィと朱傍）
16　區也　B
一〇八1　閻魔王　乙ABC
1　法師　乙ABC
1　首楞厳経ヲ　乙ABC

2　此ノ経ヲ　野乙B
2　説ヲ　北乙AC（北はテと朱訂）

巻六第四十話

一〇八15　并ニ温室ヲ　乙ABC
15　船ノ人一時ニ去ヌ其　乙ABC
後道珎

一〇九1　一人ノ　ABC
1　乗テ　乙ABC
3　此等ノ事　北乙ABC
4　遂ニ道珎　野乙ABC
5　生レヌト　野乙ABC
5　知ル　乙AB
5　経営ヲ　乙ABC

巻六第四十一話

一〇九10　張居道　乙ABC
13　死ヌ　底乙BC
15　同語訴テ　ABC（Bはニィと朱補）
一一〇2　行ク門路ノ中ニメ　乙ABC（Cはシテ）

3　活ル事　諸（底の活は変　活と朱傍、事の下に底はヲ、Bはチィと朱補）
7　使者道ヲ　乙ABC
10　致シタル生類　AB
10　此ノ功徳ニ依テ　乙AB
11　生ク路ニ　底北野

巻六第四十二話
一一一6　十月四日ニ　乙ABC
7　恵表沼等　野乙C
10　後ニ五百歳ノ　ABC

巻六第四十三話
一一二4　長生不死ノ法ヲ　ABC
6　三蔵菩薩値テ　AB（Bはニィと朱補）
7　勝レタリ有リヤ否ヤト野
8　宣フ　乙ABC

巻六第四十四話
一一三5　軽シト見テ　乙ABC
8　其時　ABC

10　教へ給フト見テ　乙ＡＢＣ
11　教ノ如ク　野乙ＢＣ
13　思ル　ＡＢ（Ｂはルにヒィと朱傍）

巻六第四十五話
一一四1　合一部　乙ＡＢ
6　午ノ時ニ　乙ＡＢＣ
10　一人屠兒　ＡＢＣ（ＡＢＣは児）
13　此等ノ身ヲ　乙ＡＢＣ

巻六第四十六話
一一五3　張謝敷依薬師経力　諸（諸は薬）
3　除病語　野乙ＡＢＣ
12　経ノ文　諸
14　不違ハ　乙ＡＢ
14　末世ノ人ノ　乙ＡＢＣ

巻六第四十七話
一一六2　張李通　野乙ＡＢＣ
2　書寫薬師経　野乙ＡＢＣ（野乙ＡＢＣは薬）

| | | |
|---|---|---|
| 2 | 延命語 | 野乙ＡＢＣ |
| 3 | 有リ | ＡＢ |
| 12 | 此 | 乙ＡＢＣ |
| 13 | 偏ニ | 乙ＡＢ |

巻六第四十八話

| | | |
|---|---|---|
| 一一七2 | 聞壽命経 | 野乙ＡＢＣ |
| 8 | 入ヌ | 乙ＡＢＣ |
| 10 | 昨日許也ト | 乙ＡＢＣ |
| 11 | 寄宿シタリ | 乙Ｃ |
| 13 | 浅キ智ヲ | 乙ＡＢＣ（Ｂはヲの下に以歟と朱補） |
| 15 | 受持セラレム | ＡＢＣ |

## おわりに

『今昔物語』巻六の本文の異同を見ると、彦根城博物館所蔵『今昔物語』と同じ表現を多くもつのは流布本系諸本（内閣文庫本ＡＢＣ、東大本乙）である。また、これまでの巻では、内閣文庫本Ｂの表現が彦根城博物館本の表現と一致する箇所が多く、それは、空白などの形式[7]と同じ傾向にあったが、巻六の場合も文字数の空白が内閣文庫本Ｂとほぼ一致する。

また、巻三では、特に、野村本が流布本系と古本系との狭間で揺れている様を見てとることができたが、巻六でも同

様の傾向を見ることができた。巻三において、様々な要件から、流布本系は、校訂本文を目指した書物群ではなかったかと推測したが、巻六第二十二話においても古本系の東大本甲と東北大本と流布本系の内閣文庫本Bと彦根本は「二十三話」とし、流布本系の東大本乙と内閣文庫本Aと古本系と流布本系の間で揺れている野村本は、「二十二話」としている。現状の『今昔物語集』においては「二十二話」の方が正しいので、流布本系は校訂を行った結果、そのように変えたのではないかと推測する。そのような観点から見ると、ここでも、彦根本は内閣文庫本Bと同様に訂正を加えることをしていない。

これまで、彦根城博物館本は古態本と流布本の中間的な本として位置づけてきたが、巻六においても少なからず、その傾向がみえる。今後も、古本の表記や字句との関連を目配りしつつ、その位置づけを考えていくこととしたい。

## 注

(1) 中根「未紹介本『今昔物語』（彦根博物館所蔵）についての一考察」（『愛知県立大学説林』53号　二〇〇五年三月）

(2) 中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻一の本文の位置づけ」（『愛知県立大学文学部論集』54号　二〇〇六年三月）

(3) 中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻二の本文の位置づけ」（『愛知県立大学文学部論集』55号　二〇〇七年三月）

(4) 中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻三の本文の位置づけ」（『愛知県立大学文学部論集』56号　二〇〇八年三月）

(5) 中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻四の本文の位置づけ」（『愛知県立大学文学部論集』57号　二〇〇九年三月）

(6) 中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻五の本文の位置づけ」（『愛知県立大学文学部論集』58号　二〇一〇年三月）

(7) (1)に同じ。

本稿の中で引用した旧日本古典文学大系の校異は、『今昔物語集二』山田孝雄　山田忠雄　山田英雄　山田俊雄　岩波書店　一九六〇年によるものである。